

森 麻季 ソプラノリサイタル

モーツァルト生誕250年記念プログラム

ピアノ：山岸茂人

1部

モテット「踊れ、喜べ、汝幸いなる魂よ」

幻想曲ニ短調 (ピアノソロ)

「証聖者の盛儀晩課」より

すべての国よ、主をほめたたえよ

ミサ曲第16番 ハ短調 (ハ短調ミサ)より

第2曲 グロリア〜われら主をたたえ

第3曲 クレド〜精霊によって聖母マリアより肉体を受け

2部

「皇帝ティートの慈悲」より 涙する以外の何事も

「フィガロの結婚」より

やっとその時が来た〜早く来て、いとしい人よ

「魔笛」より ああ、愛の喜びは露と消え

「美しいフランソワーズ」による12の変奏曲 (ピアノソロ)

「羊飼いの王様」より

あの人を愛そう、心変わりはいらない

大気は澄み

春

2006 四季コンサート

2006年4月28日(金)6:45 PM

会場：浜松市教育文化会館

主催：浜松音楽友の会

プロフィール

森 麻季 (ソプラノ)

東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。同大学院独唱専攻修了。文化庁海外派遣でミラノ、五島記念オペラ新人賞でミュンヘンへ留学中、ドミンゴ世界オペラコンテストを始め、国内外のコンクールで受賞を重ねる。ドミンゴに認められ、ワシントン国立歌劇場でアメリカデビュー以来、ワシントンとロスで〈後宮からの逃走〉〈リゴレット〉〈バルシファル〉〈ホフマン物語〉〈ウェルテル〉〈こうもり〉をドミンゴ、フォン・シュターデ、アラニア、ジュリー・アンダーソン、ブレンデル、ケント・ナガノと共演し絶賛を博す。昨年はサントリーホールでルイゾットー、サッパティエニと〈ラ・ボエーム〉、ヴェネツィアでゴーギャンのオリジナルテキストを使った新作オペラ、ソフィア国立歌劇場〈リゴレット〉に出演。

小澤征爾、チョン・ミュンフンをはじめとする指揮者や内外のオーケストラとの共演も数多く、2005年はアッシュケナージ指揮NHK交響楽団とモーツァルト〈レクイエム〉〈第九〉で共演。アテネオリンピック団結式やメジャーリーグ開幕戦で国歌斉唱を行い、NHK大河ドラマ「義経」の紀行テーマ曲を歌う。今後は、ウィーン・フィルのメンバーやゲヴァントハウス・バハ・オーケストラとも共演(2006年)、ドレスデン国立歌劇場〈バラの騎士〉に出演(2007年)。出光音楽賞、ホテルオークラ賞、ワシントン賞受賞。二期会会員。

山岸茂人 (ピアノ)

東京藝術大学音楽学部楽理科卒業、同大学大学院(音楽学専攻)修了。在学中に安宅賞受賞。ピアノを川口恒子、渡辺健二、高出祐子の諸氏に、音楽学を船山隆、本田脩の各氏に師事。2000年より度々、ライナー・ホフマン教授によるドイツ歌曲講習会を受講。

声楽の伴奏者として、これまでに多くの著名な歌手と共演している。

現在、上田女子短期大学、聖徳大学大学院非常勤講師、二期会イタリア歌曲研究会ピアニスト。

森 麻季
ソプラノリサイタル



MAKI MORI
SOPRANO RECITAL

W.A.モーツァルト (1756-1791)

●モテット「踊れ、喜べ、汝幸いなる魂よ」へ長調 K.165 (158a)

このモテットは、1773年にオペラ〈ルーチョ・シッラ〉上演のためにモーツァルトがミラノを訪れた際、このオペラに出演したカストラート歌手、ラウツィーニのために書かれた。当時イタリアでは、このような世俗的な教会音楽が盛んに演奏されていた。歌手の華やかな技量を発揮させるその音楽は、さながら声の協奏曲といえよう。

曲は第1楽章アレグロ、第2楽章アンダンテ、第3楽章アレグロの3楽章構成。第3楽章は、コロラトゥーラの名品としてあまりにも名高い。

●幻想曲二短調 K.397 (385g) (ピアノ・ソロ)

モーツァルトが得意とした即興演奏の片鱗を伺い知ることができる作品であると同時に、まるで夢の中にいるような不思議な魅力をもった一曲である。97小節のみが残された未完成の曲であり（自筆譜や筆写譜は存在しない）、その謎をめぐる様々な説が唱えられている。

●〈証聖者の盛儀晩課（ヴェスペレ）〉ハ長調 K.339より

第5曲「すべての国よ、主をほめたたえよ」（ラウダーテ・ドミヌム）

大聖堂の街ザルツブルクで生まれ育ったモーツァルトにとって、教会音楽はきわめて身近な存在であり、12歳の時に初めてミサ曲を作曲して以来、生涯に約80曲にのぼる教会音楽が生み出されている。〈証聖者の盛儀晩課〉ハ長調は、モーツァルトのザルツブルク時代最後の時期、1780年に作曲された壮麗な作品。第5曲「ラウダーテ・ドミヌム」は、明るい光が差し込むような優しさに満ちた一曲である。

●〈ミサ曲第16番 ハ短調（ハ短調ミサ）〉K.427 (417a) より

「われら主をたたえ」「精霊によって聖母マリアより肉体を受け」

モーツァルトがウィーン時代に書いた数少ない教会音楽の一つで、未完成ながら、バッハの〈ロ短調ミサ〉とベートーヴェンの〈ミサ・ソレムニス〉にも並び称される傑作。モーツァルトはこの作品を、コンスタンツェとの結婚が成就した晩に故郷ザルツブルクの教会に奉獻する目的で作曲した。ソプラノ・パートは、コンスタンツェのために書かれたものである。今回演奏される2曲は、第2曲「グロリア」と第3曲「クレド」からのソプラノ独唱部分。コロラトゥーラ技法を織りまぜながら、ソプラノの華やかな歌唱が展開する。

●歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉K.621より“涙する以外の何事も”

モーツァルトが〈魔笛〉と〈レクイエム〉作曲中の1791年にわずか18日間で書き上げたといわれる〈皇帝ティートの慈悲〉は、モーツァルト最後のオペラにふさわしく、美しい音楽にあふれている。このアリアは、皇帝の暗殺に手を染めてしまった兄セストの助命を求め、セルヴィッラが切々と歌い上げる一曲。

●歌劇〈フィガロの結婚〉K.492より“やっとその時が来た～早く来て、いとしい人よ”

円熟期のモーツァルトが書いたオペラ・ブッフアの最高傑作〈フィガロの結婚〉。このアリアは、その第4幕でフィガロの許嫁スザンナが歌う一曲。自分に下心を見せる伯爵の浮気の現場を押さえるために、伯爵夫人と衣装を取り替えて登場するスザンナ。近くにフィガロが隠れていることを知っている彼女は、声だけがフィガロに聞こえるようにして、この見せかけの愛のアリアを歌う。

●歌劇〈魔笛〉K.620より“ああ、愛の喜びは露と消え”

おとぎ話のような舞台効果の中に崇高な象徴をも織り込み、様々なスタイルの音楽が見事に統合された、モーツァルト晩年の傑作〈魔笛〉。第2幕で歌われるこの一曲は、可憐な乙女の切ない思いを表した名アリアとして知られる。王子タミーノとともに大司祭ザラストロの試練を受けるパミーナは、タミーノが「沈黙の試練」で自分に何も話しかけないことを自分への心変わりとして誤解し、絶望してこのアリアを歌う。

●〈美しいフランソワーズ〉による12の変奏曲 K.353 (300f) (ピアノ・ソロ)

有名な〈キラキラ星変奏曲〉と同じく、フランスの俗謡を主題にした変奏曲。モーツァルトは1778年にパリに滞在した折に、これ聞いたのだろつと言われている。6/8拍子の甘く美しい主題に始まり、次第に華やかな変奏が繰り広げられる。

●歌劇〈羊飼いの王様〉K.208より“あの人を愛そう、心変わりはしない” “大気は澄み”

モーツァルトは10代のうちに約10曲ものオペラを書いたが、〈羊飼いの王様〉はその最後の一曲として19歳の時に作曲された。美しいアリアが全編にちりばめられているが、アミンタのアリア“あの人を愛そう、心変わりはしない”はもっとも情感あふれる一曲として有名。そしてやはりアミンタが歌う“大気は澄み”は、優美で快活な一曲。このオペラの主役アミンタは、当時はカストラート（去勢された男性ソプラノ）によって歌われたので、今日ではソプラノの役となっている。